
四葉のクローバーと猫

にょんむらさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

四葉のクローバーと猫

【Nコード】

N0142Z

【作者名】

にょんむらさん

【あらすじ】

一人の女性に長い片思いをしている男子の昔から今までの実体験。大人になってから解った、その女性の気持ちとその結末。

猫1匹目

自分にはこの人しかいない、そう思い何年たったのだろうか。

2000年 4月

僕は今年の春から大学生になる。

花のキャンパスライフを存分に楽しむつもりだ。

田舎から出て来た僕は福岡という大都会にかなりのあこがれを持っていた。

単純に親元を離れ、大人という未知の世界に足を踏み入れる自分が楽しみでしかたなかったのだ。

酒、クラブ、車、そして女遊び、やりたい事はいっぱいだ。

その時はまだはつきりとした将来の目的もなく、ただ単純に開放感に浸っていたかっただけかもしれない。

実際大学に入った当初は自分の想像してた通りの生活だった。

友達もすぐにできて携帯のメモリーの追加は一週間で1000人をゆうに超える。

夜中も大学の友達とたむろして酒を呑み遊びまくる。

そんな毎日だった。

そんな生活の中で僕は彼女と出会う。

彼女は大学の始めての講義で隣の席に座っていた女性だ。

お恥ずかしい話、一目惚れでした。

とりあえず仲良くなろうと話すきっかけを探した。

すると僕は、ドラえもんの落書きをしている彼女にチャンスだと思
い、話かけすぐ仲良くなった。

その時僕は、彼女との距離を狭めようと頑張ろうと決意した。

猫2匹目

僕は自分でいうのもなんだが、今までは結構モテた方だ。

むしろモテたい為にいろいろ頑張ってきた方だ。

女性に自分から声をかけるのは苦手だったが、逆にそうさせる努力はしていた。

少し悪ぶってみたり、髪の毛も染めて、ツンツンに立てていた。

もちろん当時の自分の中ではオシャレにも気を使っていたと思う。

流行について行こうと雑誌も沢山読んだ。

だから、今までも何となく女性が簡単に寄って来た。

思えば高校生活はある意味バラ色だったと思う。

僕は高校の進路選択の時、二つの道を迷っていた。

一つは教師という道。

家は両親が共に教育者で、親もそれを望んでいたし、自分も興味があった。

もう一つは美容師という道。

それは、自分がいつまでもカッコいい男でいたいと思ったからだ。

当時はカリスマ美容師ブーム、オシャレに片足を突っ込んだばかりの高校生には魅力的だった。

そんな迷ってた時、僕は警察のお世話になった。

両親には多大な迷惑をかけてしまった。

そして、両親の説得もあり僕は大学に行く事を決めた。

猫3匹目

彼女は学校でもモテる女性だった。

当時の自分から見てオシャレで、スタイルも良く、なによりも美人だった。

いつもそっけない感じなのに、たまにとても可愛い笑顔で笑う。

そんな飴とムチのような女性だった。

でも、僕はそんな彼女の魅力に、すっかりはまってしまった。

正直周りの男達はみんな彼女を気にかけていたかもしれない。

たくさんの男達が話しかける、そんな光景を良く目にした。

僕は、それが何か嫌だった。

そして彼女と仲良くなって2週間がたった。

あいかわらず学校にはあまり行かず、毎日遊びほうけていた。

彼女とも友達を含めてたが、呑む機会は結構あった。

そんなある日。

僕の家の米がなくなった。

毎日遊んでるから米を買い金もない。

偶然だろうか、彼女から電話がかかってきた。

軽い気持ちで米の話をする、彼女が米を家まで届けてくれることになった。

かなりテンションが上がる僕。

しかし、その瞬間僕の家の大掃除がはじまる。

制限時間は2時間弱。

猫4匹目

始めて二人つきりだ。

とりあえず急いで片付ける僕。

応急処置だが、何とか見れる部屋にはなった。

ほっとしてる暇もなく彼女がやって来た。

慣れてるのか、彼女はいつも通りだった。

持って来てもらった米を使い二人でカレーを食べた。

そして何となく二人で過ごす。

こういう時テレビは便利だ。

彼女との話題にもなるし、間もつまくもつ。

そんな事をしてると、彼女がビデオを借りに行こうと言った。

近くのビデオ屋まで二人で歩いて行く。

恋人みたいで、僕は優越感に浸っていた。

彼女に任せてビデオを選んでもらうと、何と彼女が持っていたのは

稲川淳二の心霊ビデオだった。

まったく意味が分からなかったが、二人で見た。

時間はもう12時を回っている。

稲川淳二のビデオがやたら怖い。

心霊写真が出るたびに二人でビビりまくる。

いつの間にか二人は寄り添っていた。

怖い心霊写真が気になる反面、寄り添ってくる彼女が気になってしょうがなかった。

怖いだけなのか、それとも僕に気があるのか解らなかった。

それでも、ぐつと腕をつかむ彼女がとても愛おしかった。

しかし、僕は何もできなかった。

猫5匹目

その気になれば、そのまま押し倒す事もできたと思う。

今までの僕なら確実にそうしていた。

それなのに、その時はなぜか自分に自信が持てなかった。

彼女がいつも通りの顔をしていたからかもしれない。

たぶん、強引にいったら彼女に嫌われるという思いがあったと思う。

結局ビデオも終わり、二人で話をしているうちに夜が明け彼女は帰った。

その日の朝、僕は大きなチャンスを逃したような気がした。

彼女はどこういう気持ちだったのか、自分は果たしてこれで良かったのかと。

自分的にはしっかりとした段階を踏んで彼女とは恋愛をしたいと思っていた。

反面、今までが楽な恋愛をしていて、自分を好きという確信がなければ、自分からは行かない。

そう言い訳をしたのではなかったかと思った。

どちらにしろ、僕は彼女に思いを告げられるチャンスがありながらそれをしなかっただけだ。

これが僕の第一の失敗だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0142z/>

四葉のクローバーと猫

2011年12月4日01時52分発行